



5月16日 特別公開講座  
講師：武田勝年理事長

## A先生の新語コーナー



### liúshǒu jiātíng “留守家庭”

留守を守る家庭。親が出稼ぎに行き、残された子供が祖父母などと一緒に暮らしている世帯を指す。現在、中国にはこうした家庭が7000万世帯あり、そのうち農村部が全体の77%を占めている。国家衛生計画出生率委員会が昨年発表した初の「中国家庭発展報告」で明らかにされたもの。同報告によれば、中国の世帯総数は約4億3000万世帯で、世界全体の5分の1前後を占める。また、核家族化が進み、単身世帯も増えている。

(A)

## 校友会第19回中国旅行報告

# 『黄河中流域の自然を訪ねる旅』



2014年度の中国旅行は、標高2,000mを越える華（Huà）山にケーブルカーで登る関係で、現地の気温が高くなる2015年4月10日～16日に催行した。

旅程は、黄河中流域の見所を上流から下流へと移動しながら回ることにした。世界遺産に登録されている場所是一个所もなかったが、十分に魅力的な黄河の自然と歴史を見ることができた。

### 1 羽田から运城へ（4月10日）

9：25発の全日空NH951便で羽田から北京首都空港へ向かった。ほぼ定時の12時半（以下現地時間）に着き、第3ターミナルで19：25発のCA1139を待った。現地旅行社が交渉してくれて、すぐにチェックインし荷物を預けた。

搭乗までは空港内の泰辣椒という店の個室を確保し、夕食もそこで摂ることにして、それまでは自由時間とした。機内で昼食が早々と出たので、16時には夕食にした。料理はどれも辣かった。

17時過ぎから手荷物検査場を通して、ゲート前で19時の搭乗開始を待った。離陸は定時から40分近く遅れ、运城関公空港には21時半過ぎに到着した。

現地ガイドの徐さんと運転手の劉さんが、洛陽からはるばる出迎えに来た。22時半前に飛び石で3

泊する運城建国飯店に投宿した。2年前に改築したばかりで、とても綺麗なホテルであった。

### 2 壺口瀑布（pùbù）（11日）

前日の到着が遅かったので、9時過ぎに出発した。途中休憩を挟んで、京昆高速（G5）を北上し、昼前に西向きの青蘭高速（G22）に移った。

ここからはなだらかな呂梁山の上を連続するトンネルで抜ける道となり、路面の標高は1,300mにも達した。

バスからはまだ人が住んでいる窯洞（yáodòng）がたくさん見られた。

壺口で13時前に高速を下り、この日に泊る壺口飯店で昼食を摂った。

瀑布へは食事後専用バスに乗って行き、先に山西省側から見学した。

16時に一旦専用バスでホテル前に戻り、G22経由で陝西省側に黄河を渡って、再度反対側から瀑布を見学した。帰りは国道橋を徒歩で渡ってホテルに戻った。夕食はホテルで摂った。

### 3 龍門村大禹（Yǔ）廟と龍門口（12日）

朝は風も強く5℃まで冷えた。壺口の冬は氷点下10℃まで下がるそうである。

呂梁山をコの字に迂回し、河津でG5を下り、金港龍湾生態園という温室リゾート施設で昼食を摂った。

昼食後、2012年に龍門村に新築された大禹廟を見て、先に禹王と治水に関する知識を仕入れた。

その後、登龍門の故事の場所である龍門口の鉄橋でバスを降り、橋の上から上流の幅300mほどの天然のダム湖、100mほどの龍門口の橋、川幅がkm級に広がった下流側を見比べた。

夕方早めに運城建国飯店に再度投宿した。ホテルの向かい側は書店で、ホテルの隣には小さな関帝廟があり、その前では夜市が開かれていた。夕食まで街を散策し、ホテルで夕食を摂った。

#### 4 池神廟と塩湖、関帝廟（13日午前）

前日強かった風は納まった。

解（Hài/Xiè）池の畔に建つ池神廟で塩湖に関する展示を見た。前年の旅行で訪れた開封の府尹だった包公も、ここの塩官をしていたことが解った。

池神廟からは解池が見渡せた。解池のまん中に対岸に渡る道が出来ていて、その途中から解池の岸に下りて、舐めたりして塩湖の塩を実体験した。解池の中央に大きなドームの中国死海リゾート施設があり、その中では浮游体験や黒泥美容ができるという。

もう一つの塩湖である硝池との間に解州関帝廟がある。規模は前年の旅行で行った洛陽の関林の数倍で、やはり本家だと感心した。

奥の春秋殿の楼上からは硝池が展望できた。建物の前には樹齢1,400年の柏の樹が屋根よりも高く聳えていた。

昼食は関帝廟内にある関府家宴で摂った。

#### 5 鸛鵲樓、御温泉（13日午後）

食後永斉に向い、鸛鵲（Guànnüè）樓に登った。この地は、元が攻め込むまでは長安-洛陽間の交通の要衝で、蒲津渡と言った。黄河がL字型に曲るすこし上流に浮き橋がかかっている、鸛鵲樓は対岸を見張るためにあったらしい。

日中学院のTシャツの背にも『登鸛鵲樓』の詩文「白日依山盡～更上一層樓」が印刷されている。

建物はコンクリートで再建されたもので、エレベーターで上がると、黄河とその対岸や中条山が見渡せ、詩を書いている王之渙の銅像があった。

鸛鵲樓を出て、黄河がL字型に曲ったすぐ下流の鳳陵渡で渡り、陝西省に入り、連霍高速（G30）で西に向った。

華山の麓を西に少し過ぎたところにあるリゾート施設の御温泉内にあるホテルに泊った。夕食はホテルで摂り、夜中まで開いている源泉温度105℃の露天温泉に入りたい人は水着で出かけた。

#### 6 華山西峰（14日午前）

この日は快晴で無風だった。華山は早く行かないと混むので、7時半にホテルを出て、入山ゲートに8時に着いた。ロープウェイの起点へ行く専用バスに乗ったのは9時ごろであった。

山道を40分ほど登ってバスを下り、五つもある階段を登った上からゴンドラに乗れたのは、10時過ぎであった。

標高はすでに1,000mはある。ロープウェイは一度峰を越えて、谷底にある中間駅（客扱いなし）から再度数百mの垂直の崖の最上部に穴を開けて作った終点を目指した。標高差900mで4.2kmの行程を、20分強で上がった。

西峰の山頂へは、さらに石段と花崗岩の坂道を150mほど登った。山頂からの眺めは筆に尽くし難い。

山頂には40分ほどいて、再び石段、ロープウェイ、専用バス、観光バスと乗継ぎ、13時には華山客棧に着き、昼食を摂った。

#### 7 函谷関と函谷古道（14日午後）

昼食後G30を東進した。途中渭（Wèi）河が黄河のL字型の部分で合流するところで山の上に再建された潼（Tóng）関があるのが見えた。

函（Hán）谷関も再建されたもので、関に行く手前に金色の大きな老子の像が建っていた。老子はここで『道德経』を著したという。

函谷関の西側に続く、箱根の山よりもはるかに歩き易い函谷古道をすこし歩いた。函谷古道を跨ぐ国道橋の上からも函谷関と古道が鳥瞰できた。

三門峽の市街に入り、陝州公園の中にある天鵝湖国際大酒店に投宿した。今回は最高級のホテルであった。

夕食はこのホテルが宣伝している一人58元のバイキングであったが、ビールやワイン、薬酒も飲み放題であった。

## 8 天鵝湖、三門峽ダム (15日午前)

出発前に時間が取れたので、ダム湖である天鵝(白鳥)湖を見た。砂泥は湖底に沈んでいて、水は緑色だった。

10時前にホテルを出て14kmほど下流に行き、黄河に始めて作られた三門峽ダムへ行った。エレベーターで降りて、発電側と放流側の堰堤間にある突堤まで行ってダムを眺めた。

一度市街まで戻り、12時前から金玫瑰大酒店で昼食を摂った。

## 9 黄河丹峽 (15日午後)

13時には昼食を終え、G30を東進し、澗 (Miǎn) 池で高速を下り、30km北を流れる黄河に向かって山道を走り、1時間半で丹峽の入口ゲートに着いた。

専用バスに乗り換えて、九十九折りの道を行き、30分ほどで黄河のダム湖の畔に着いた。このダム湖は、2001年に完成した洛陽の北方にある黄河小浪底ダムによるものである。

遊覧船も繋いであったが、洛陽との間の航路はまだ認可されていないそうである。

丹峽はV字谷で、12億年前に堆積した石英砂岩の層が侵食され赤く見えるため、こう名付けられた。

水面から10mあまり上の場所に、木の栈道が組まれていて、全部歩くと4時間はかかるそうである。入り口から約30分強散策してバスに戻った。

延々とバスに乗って、三門峽の国道橋で黄河を渡り、中条山も越えて、運城建国飯店に3度目の

投宿をした。

夕食は19時半過ぎからホテルで摂り、簡単な自己紹介をした。

## 10 早朝運城発、羽田へ (16日)

北京便はこの4月から2時間早まって、8時発になったので、6時前から朝食を摂って、空港に向かった。ガイドの徐さんと運転手の劉さんに別れを告げ、首都空港では10時にやっと荷物を取り、昼食は各自で摂ることにし、自由時間とした。

11時からチェックインができ、出国検査を済ませて、出国ロビーで帰国便のNH962を待った。羽田へは予定より20分ほど早く着いた。

搭乗前に離団式をし、羽田では流れ解散した。

今回の旅行は天候に恵まれ、大きな事故や健康障害もなく、楽しく愉快に全行程を終えることができた。

添乗員の手塚さん、ガイドの徐さん、運転手の劉さん、参加者の皆さんのご尽力とご協力に感謝する。

企画・募集にご尽力いただいた校友会関係者各位にも謝意を呈する。

なお、写真入りの詳しい報告は、校友会のHP <http://xiaoyouhui.sakura.ne.jp/Lvyou/Lvyou19.htm> をご覧いただきたい。

2015年5月

校友会旅行委員猪飼記



壺口瀑布